



しびき

CONTENTS

- 1 理事長就任にあたって — 賀川彰氏
- 3 国連危険物輸送専門家小委員会【第39回】報告
- 5 ドイツのドラム缶メーカー訪問
- 6 鋼製ドラムは、リサイクルの優等生
- 7 化学工業指数の推移
- 7 200Lドラム缶市場動向推移
- 8 平成22年度出荷実績

62

第21代理事長 就任挨拶 理事長就任にあたって

日鐵ドラム株式会社 代表取締役社長
賀川 彰



—ドラム缶工業会の新理事長に就任されました。今後の工業会活動をどのように進めていきますか。抱負を含めてお聞かせください。

理事長が交代したからといって、工業会活動の基本方針が変わるものではありません。ドラム缶標準化の推進や国際活動活性化、職場の環境・安全向上、更生缶業界との連携強化などの重点課題には引き続き取り組んでいきます。特に標準化には日本のドラム缶の国際競争力を高める狙いから力を入れたいと考えています。また、国際規格問題は内容によっては需要家にも大きな影響を及ぼすことから、これまで以上に積極的に活動します。

製造設備の老朽化や世代交代は会員各社の共通の悩みです。もちろん会員各社が個別に解決すべき課題ですが、工業会として対応することが効果的な部分については取り組んでいきたいと思えます。

—ドラム缶の国際競争力を高める標準化の推進とはどのようなことですか。

ドラム缶の需要先は塗料、石油を含めて化学産業分野が全体の95%以上です。化学産業とともに生きていくのがドラム缶産業です。その日本の化学産業は、内需不振と近隣発展国の需要急拡大、生産拠点の海外移転から輸出比率を大幅に高めています。また、海外からの輸入も増加しています。同じ土俵で競う国内市場と比べて、国際市場における競争は、多くの条件差から更に厳しいものになりますが、昨今の円の独歩高がその厳しさに拍車をかけています。ドラム缶産業も課題を共有し、輸出に使用されるドラム缶については少しでも競争力を高める技術・商品開発やスペック改定の提案、ハンドリング改善の提案などに努めることが使命です。当然ながら、ドラム缶メーカー各社はこれまでもコスト削減や改善の提案に努めてきましたが、ドラム缶は共通商品であることから、1社の努力では限界があります。需要家に提案を採用して頂き、それを拡大・定着していくためには、工業会として取り組むべきことが多くあります。

—ドラム缶の国際競争力はどのように評価していますか。また、具体的な対応策はどのようなことですか。

ドラム缶業界の責務は、安定供給、品質、価格の3点です。安定供給についてはサプライチェーンが確保されており問題はありません。製品品質においても日本の技術力は世界トップレベルで、品質管理体制も高い水準にあることは確かです。しかしこの品質確保にはコストがかかっていることも事実です。

一方、価格面については、例えば中国の上海地区におけるドラム缶価格と比べれば、国内価格が高く、競争力がないことは明らかです。もちろん、現在の80円を超える行き過ぎといえる円独歩高局面では、ドラム缶に限らず日本製品の殆どが国際競争力上の問題を抱えているといえます。

しかし、国内ドラム缶が高い原因は為替だけではありません。鋼材の板厚が厚いこと、要求される高度な品質レベル、鋼材価格、部品・塗料価格、人件費差、輸送費などです。残念なことに、日本のほうが有利な条件は見当たりません。

このなかで影響の最も大きい板厚については、薄手ドラム缶を採用することで解決できます。国際市場では胴板厚0.9mmが一般化しており、これが国際標準にもなっています。

ドラム缶の国内向けはリユース比率が高く、厚手ドラム缶を繰り返しリユースすることで、コストパフォーマンスが良いケースもあります。一方、輸出向けは、ワンウェイであり、海外の需要家も使いなれていることから薄手ドラム缶の採用を推奨してきました。6年前に工業会で規格を定め、各社は製造・供給体制を整えています。採用される需要家は増加していますが、まだ比率は少ない状況です。

品質レベルについては、海外のドラム缶と比較してオーバースペックである部分があります。しかし、需要家にスペックダウンの理解を得ることは難しいことです。海外のドラム缶の品質やハンドリング方法などについての情報を積極的に

提供して、徐々に理解を得ていきたいと考えています。

鋼材価格の内外格差については、現在は過去最大の状況です。時間が解決してくれることを期待しています。

塗料については、工業会活動として標準14色への統一をお願いして効果をあげた経緯がありますが、今後ともコストダウンの検討・提案を続けるつもりです。

— 国際活動への取り組みはいかがですか。

昨年秋に福岡で開催したAOSD (アジア・オセアニア鋼製ドラム缶製造業者協会) 国際会議は、大きな成果を得ました。日本の技術力や品質管理へのアジア各国の関心は高く、これからも協力できるところは積極的に対応していきたいと思っています。また若い世代を中心にした海外へのミッションでは、欧米での最新のドラム缶生産設備など、設備面を中心にした視察も計画しています。次代の生産体制を考えるとともにドラム缶業界として人材の育成につながるこの活動には力を入れていきます。

我々ドラム缶産業は、化学産業の一部といえます。化学産業の発展がなければ、ドラム缶産業の安定はあり得ません。ドラム缶工業会は容器のプロフェッショナル集団として、技術開発、コストダウンの実行と提案、海外情報の収集・提供に努め、少しでも化学産業のお役にたてるよう活動していきます。



よろしくお願いたします！

新 役 員 紹 介

平成23年8月1日時点

| | | | | |
|--------|------------|--------|--------------|-----------|
| ■ 理事長 | | 賀川 彰 | 日鐵ドラム(株) | 代表取締役社長 |
| ■ 副理事長 | ● 200L缶関係 | 中島 廣久 | JFEコンテナ(株) | 代表取締役社長 |
| | ● 中小型缶関係 | 山本 雄造 | (株)山本工作所 | 代表取締役社長 |
| | ● ペール缶関係 | 野上 正道 | (株)ジャパンペール | 代表取締役社長 |
| ■ 常任理事 | | 斎藤 邦一 | 斎藤ドラム罐工業(株) | 代表取締役社長 |
| | | 関根 利三郎 | 新邦工業(株) | 代表取締役社長 |
| | | 河島 秀行 | ダイカン(株) | 代表取締役社長 |
| | ■ 兼監事 | 中村 君子 | (株)東京ドラム罐製作所 | 代表取締役社長 |
| | | 下川 洋治 | 東邦シートフレーム(株) | 代表取締役社長 |
| | | 長尾 浩志 | (株)長尾製缶所 | 代表取締役社長 |
| | ■ 兼監事 | 前田 洋 | (株)前田製作所 | 代表取締役社長 |
| ■ 委員長 | ● 企画・統計委員長 | 渡来 信介 | 日鐵ドラム(株) | 取締役常務執行役員 |
| | ● 技術委員長 | 加藤 安功 | JFEコンテナ(株) | 常務取締役 |
| | ● ペール委員長 | 松田 賢治 | (株)ジャパンペール | 技術企画室 室長 |

(注) 任期は平成23年度総会より3年。

危険物輸送に関する国連勧告検討の場に出席して

国連危険物輸送専門家 小委員会【第39回】 報告

平成23年6月20日～24日 スイス・ジュネーブ

危険物輸送に関する国連勧告を検討する場である専門家小委員会の第39回が平成23年6月20日～24日にかけてスイス・ジュネーブの国際連合欧州本部で開催されました。当小委員会は毎年6月頃と12月頃に開催され、2年間4回の会議で出た結論が一区切りとしてまとめられて、危険物輸送に関する勧告として出版されます。これは表紙の色からオレンジブックと呼ばれています。(次ページの写真参照)

この危険物輸送に関する勧告は、危険物輸送の規制に係る政府ならびに国際機関にあてられたものであり、輸送中の人や財産に対する事故及び環境への被害を防ぐことにより高度の安全性を確保すると同時に、あらゆる国で適用が可能な統一した規制の枠組みを提供するものです。この勧告に基づいた世界的なレベルでの法規制の統一は貿易を容易にする重要な因子でもあります。

当会議の重要性はよく認識していましたが、半年に1度ジュネーブで開催される関係で、出席を認められた専門家非政府組織(NGO)のICDM(国際ドラム缶製造業者連合会)からはSEFA(欧州ドラム缶工業会)が代表で出席し、時々SSCI(米国ドラム缶工業会)からも出席するといった状況で、AOSD(アジア・オセアニア鋼製ドラム缶製造業者協会)からは出席したことがありませんでした。

出席して会議実態を把握し、ICDMの当会議への対応を再検討し、AOSDの立場からも対応できればすべきとの考えから事務局長を派遣することが決まりました。

ICDMからの出席を常に当会議でアピールすること(ショウザフラッグ)の必要性はICDMメンバーが共通のものとして認識していたので、AOSDからの出席はSEFA及びSSCIから歓迎されました。

主な出席者

①ICDM

ホプナーSEFA事務局長
米倉AOSD事務局長

②各国政府代表

規制担当部門からが一般的
議長は英国のハート氏(運輸省危険物輸送部門)

③委員国 22カ国

アルゼンチン、オーストラリア、オーストリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、中国、フィンランド、フランス、ドイツ、イタリア、日本、オランダ、ノルウェー、ポーランド、韓国、南アフリカ、スペイン、スウェーデン、スイス、英国及び米国

④オブザーバー国

2カ国…ルーマニア及びスロバキア

⑤国連機関、非政府国際機関等

約36機関…IAEA、IMO、WHO、ICDM、ICCR等



国際連合欧州本部：左からホプナーSEFA事務局長、米倉AOSD事務局長

結果の概要

今回は2年間に4回の会議というサイクルの最初の会議であったのでじっくり議論を尽くすことが優先されました。話がまとまらずに投票で決着をつけるというような深刻な採決はありませんでした。

ドラム缶に関するものとして、ドイツから危険な静電気の放出防止をドラム缶等の小型容器にも課そうという提案がありました。支持する意見もありましたが、静電気が問題となるのは充填及び排出時であり輸送規則のなかで規定することは適当ではない、小型容器の場合には防止措置がとりにくい等の指摘があり、ドイツ代表が再検討することになりました。

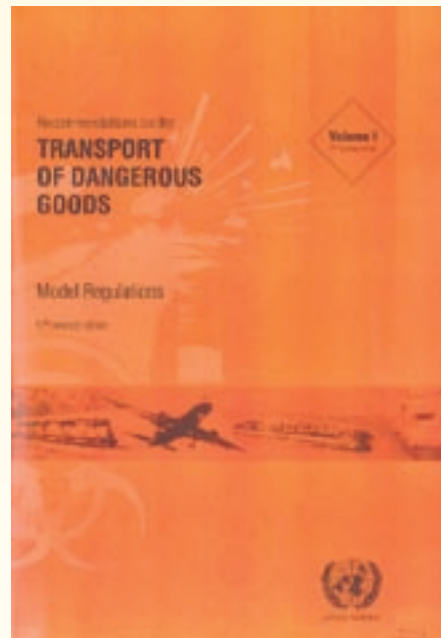
IBCに関するものとして、質量1,500kgを超える液体用IBC容器への振動試験の適用を免除する英国提案は、振動試験の有用性に疑問を示す専門家もいたものの、IBC容器への振動試験の導入は時間をかけて検討を行なった結果であり、また、提案中に指摘された問題はなく、適切に試験が実施されているとの意見も多く示されたことから、取り下げられました。

おわりに

勧告や規則に関しては欧州の国々が熱心に活動していますが、アジアの国々もこういった場での活動にもっと力を注ぐべきと思われます。SEFAとの連携も一層の強化が必要とされます。



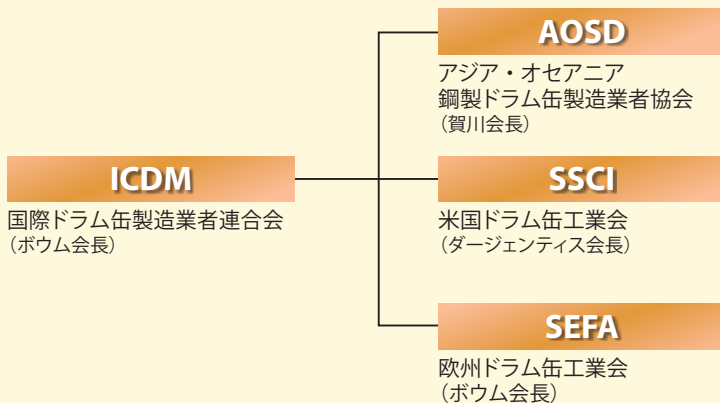
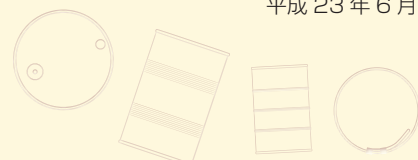
国際連合欧州本部：国際連盟本部として1937年に建造された白亜の建物



危険物輸送に関する勧告第1巻モデル規則第17改訂版 (通称 オレンジブック)

ドラム缶製造業者の国際組織図

平成 23 年 6 月 1 日



ICDM: International Confederation of Drum Manufacturers
AOSD: Association of Asia Oceanic Steel Drum Manufacturers
SSCI: Steel Shipping Container Institute
SEFA: Syndicate Europeen de L'Industrie des Futs en Acier

ドイツの ドラム缶メーカー訪問

平成23年6月24日 ドイツ・デュッセルドルフ近郊



スイス・ジュネーブでの国連の会議に派遣された米倉事務局長が6月24日にドイツのドラム缶メーカー2社を訪問する機会を得ました。6月23日がドイツのバンクホリデーであり、その翌日の金曜日という訪問には難しい日でしたが、マウザー社とグライフ社で訪問を受け入れて頂きました。両社とも世界で1・2を争う巨大グループの会社です。以下、簡単に訪問記を記します。

最初に訪問したのはブリュールのマウザー社の工場
で、ファスベンダー工場長に
対応して頂きました。ドイツ
の鋼製ドラム缶生産量は1,300万本/年程度とのことで、
10社、10工場
で生産している、ドイツの化学ビジネスが好調、
主な競合相手はIBCとのことでした。

ドイツの再生缶業者は5~6社しかないとのことで、
日本には90社近くあるという
と、びっくりされていました。薄手化に関して、
天板、地板の厚さは0.9及び1.0mm
までとのことでした。

900本/時のスピードまで出る新鋭工場も
見せて頂きました。作業環境の
良い、きれいな工場でした。



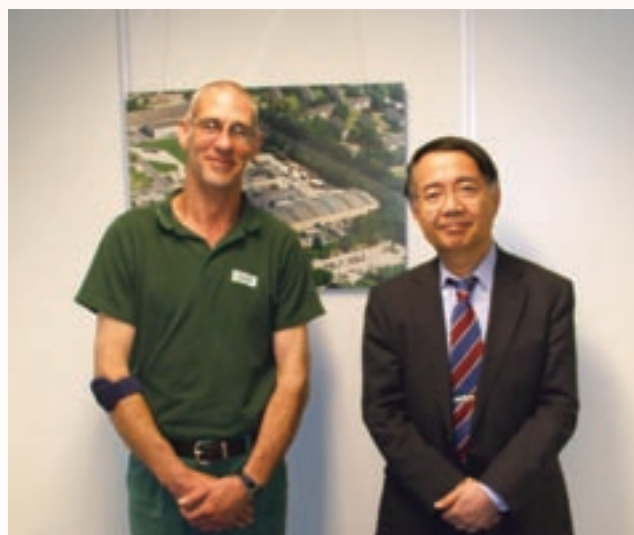
左からファスベンダー マウザー社 ブリュール工場長、米倉AOSD事務局長

次にケルンに移動し、グライフ社のケルン工場
で、ブーフハイム技術課長に
対応して頂きました。

元はバン・リーアの工場であって、40年
くらい前にできた
と聞きました。雰囲気的には現在の日本の工場に
似た感じでした。

ブーフハイム氏はエジプトやロシアにも
駐在されたことがある
技術者で、そういった国でのお話も併せて
聞くことができました。

両工場のある地域一帯はかつては製鉄業の
盛んなドイツ重工業の
一大拠点でした。今では産業構造が変化し、
住環境も非常に良くなった
ことがうかがえました。



左からブーフハイム グライフ社 技術課長、米倉AOSD事務局長

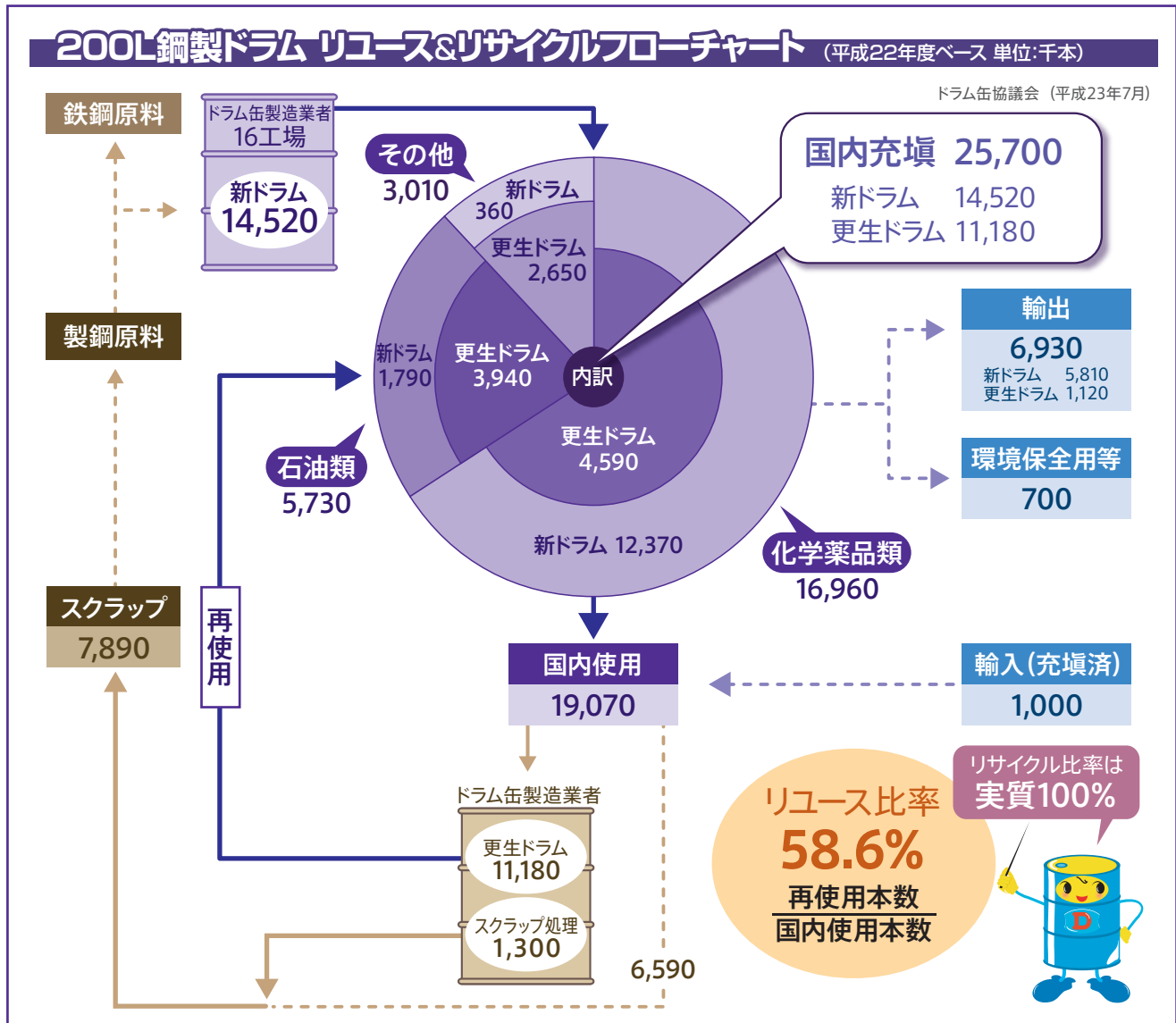


鋼製ドラムは “リサイクルの優等生”

資源としてのリサイクル比率は実質100%

鋼製ドラムは使用后、一部は更生缶メーカーに回収され、一部はユーザーから直接スクラップ処理業者に回収されています。ドラム缶はこのようにリユース（再使用）およびリサイクル（再利用）が確立しており、循環型リサイクルの

優等生といえます。下の図は平成22年度版200L鋼製ドラムリユース&リサイクルフローチャートです。ドラム缶のリユース比率は58.6%になりますが、環境保全用ドラム缶を除くと、資源としてのリサイクル比率は実質100%になります。

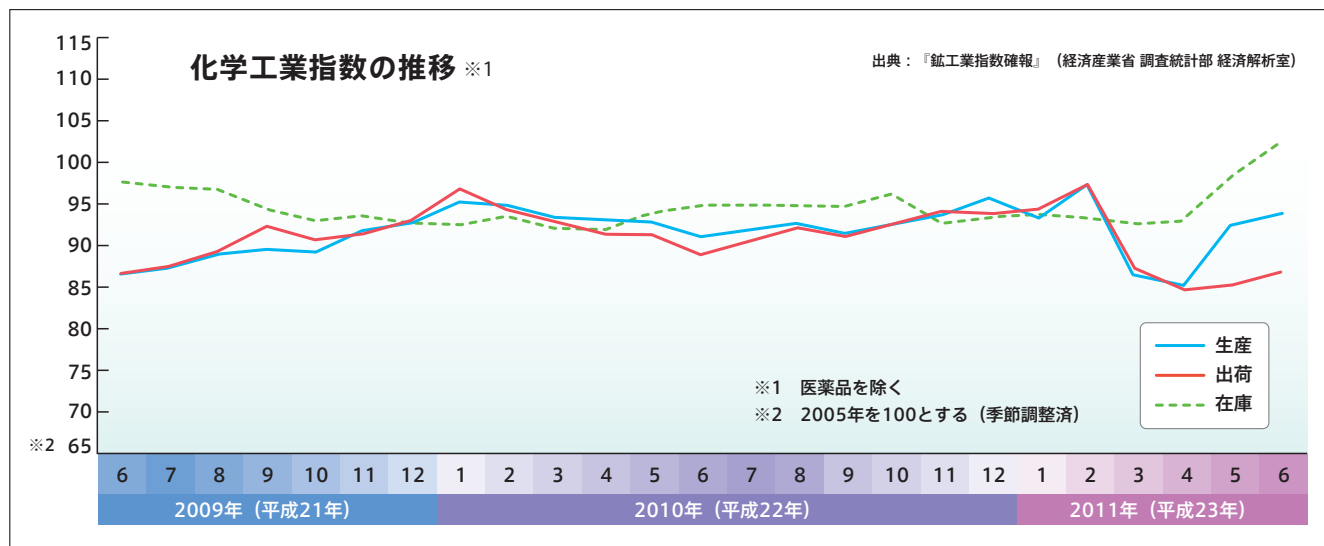


| | | 当初 (平成9年) | 17年度ベース | 18年度ベース | 19年度ベース | 20年度ベース | 21年度ベース | 22年度ベース |
|--------|-------|-----------|---------------------|---------------------|---------------------|----------------------|---------------------|---------------------|
| 工場数 | 新ドラム | 18工場 | 17工場 (変わらず) | 17工場 (変わらず) | 17工場 (変わらず) | 16工場 (▲1) | 16工場 (変わらず) | 16工場 (変わらず) |
| | 製造本数 | | | | | | | |
| 製造本数 | 新ドラム | 12,000千本 | 14,950千本 (▲1.6%) | 15,390千本 (+2.9%) | 15,800千本 (+2.6%) | 12,950千本 (▲18.0%) | 13,270千本 (+2.5%) | 14,520千本 (+9.4%) |
| | 更生ドラム | 16,000千本 | 13,660千本 (+1.3%) | 13,680千本 (+0.1%) | 13,370千本 (▲2.3%) | 11,350千本 (▲15.1%) | 10,820千本 (▲4.7%) | 11,180千本 (+3.3%) |
| 国内充填 | | 28,000千本 | 28,610千本 (▲0.2%) | 29,070千本 (+1.6%) | 29,170千本 (+0.3%) | 24,300千本 (▲16.7%) | 24,090千本 (▲0.9%) | 25,700千本 (+6.7%) |
| 国内使用 | | 26,000千本 | 23,050千本 (▲0.3%) | 23,380千本 (+1.4%) | 23,390千本 (+0.0%) | 19,580千本 (▲16.3%) | 18,000千本 (▲8.1%) | 19,070千本 (+5.9%) |
| リユース比率 | | 61.5% | 59.2% (+0.9%) | 58.5% (▲0.7%) | 57.2% (▲1.3%) | 58.0% (+0.8%) | 60.1% (+2.1%) | 58.6% (▲1.5%) |

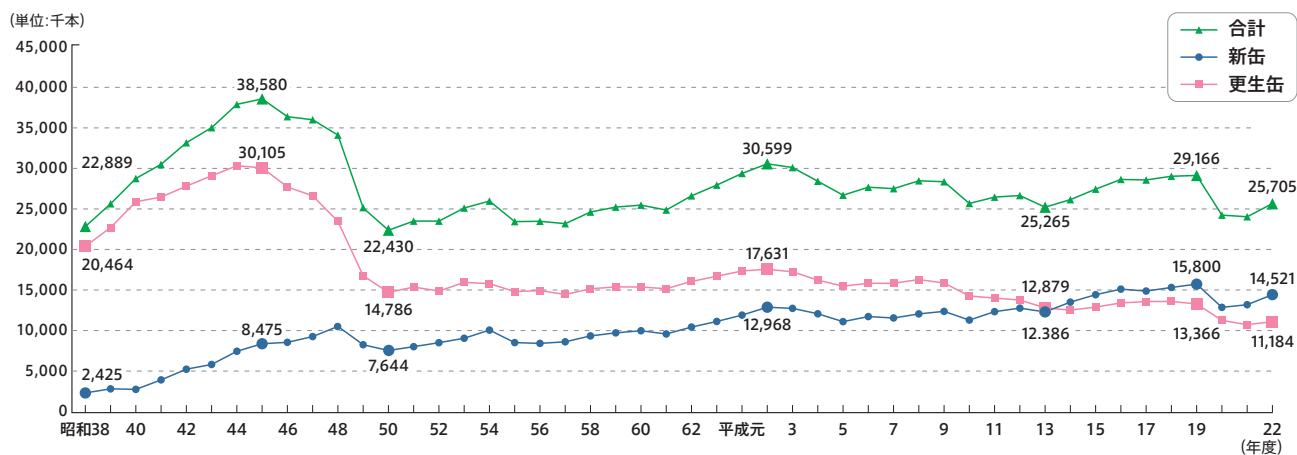


化学工業指数の推移

6月の化学工業（医薬品を除く）の生産動向を季節調整済指数で見ると、生産は前月比1.5%の上昇（前年同月比〔原指数による〕では3.0%の上昇）、出荷は同1.8%の上昇（同▲2.3%の低下）、在庫は同4.3%の上昇（同8.1%の上昇）となりました。



200Lドラム缶市場動向推移 (昭和38年度～平成22年度)



(単位:千本)

| 年度 | 昭和38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 |
|-----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 新缶 | 2,425 | 2,924 | 2,862 | 4,029 | 5,343 | 5,924 | 7,548 | 8,475 | 8,645 | 9,353 | 10,607 | 8,345 | 7,644 | 8,113 | 8,603 | 9,148 |
| 更生缶 | 20,464 | 22,763 | 25,936 | 26,510 | 27,852 | 29,125 | 30,363 | 30,105 | 27,749 | 26,666 | 23,520 | 16,830 | 14,786 | 15,444 | 14,949 | 16,018 |
| 合計 | 22,889 | 25,687 | 28,798 | 30,539 | 33,195 | 35,049 | 37,911 | 38,580 | 36,394 | 36,019 | 34,127 | 25,175 | 22,430 | 23,557 | 23,552 | 25,166 |

| 年度 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 平成元 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|-----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 新缶 | 10,149 | 8,613 | 8,518 | 8,710 | 9,436 | 9,810 | 10,070 | 9,674 | 10,523 | 11,212 | 11,993 | 12,968 | 12,822 | 12,156 | 11,189 | 11,814 |
| 更生缶 | 15,867 | 14,880 | 15,010 | 14,528 | 15,230 | 15,466 | 15,447 | 15,241 | 16,139 | 16,769 | 17,424 | 17,631 | 17,316 | 16,300 | 15,549 | 15,905 |
| 合計 | 26,016 | 23,493 | 23,528 | 23,238 | 24,666 | 25,276 | 25,517 | 24,915 | 26,662 | 27,981 | 29,417 | 30,599 | 30,138 | 28,456 | 26,738 | 27,719 |

| 年度 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
|-----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 新缶 | 11,636 | 12,142 | 12,454 | 11,380 | 12,419 | 12,849 | 12,386 | 13,590 | 14,502 | 15,186 | 14,952 | 15,393 | 15,800 | 12,945 | 13,270 | 14,521 |
| 更生缶 | 15,905 | 16,367 | 15,941 | 14,344 | 14,084 | 13,847 | 12,879 | 12,602 | 12,981 | 13,491 | 13,658 | 13,675 | 13,366 | 11,346 | 10,817 | 11,184 |
| 合計 | 27,541 | 28,509 | 28,395 | 25,724 | 26,503 | 26,696 | 25,265 | 26,192 | 27,483 | 28,677 | 28,610 | 29,068 | 29,166 | 24,291 | 24,087 | 25,705 |

(注) 1. 千本以下四捨五入。 2. 昭和38年度の生産本数不明につき、生産トン数67,002トンに40年暦年平均単重27.63kgで逆算して算出した。

平成22年度出荷実績

平成22年度の200L缶の出荷は、前年度に比べ9.4%増、1,251千本増の14,521千本と増加しました。

用途別では、石油向け（前年度比5.3%増、90千本増）、化学向け（同10.8%増、1,135千本増）、塗料向け

（同3.2%増、23千本増）と食料品以外の用途では増加しました。

ペール缶は前年度比3.6%増の20,379千本、中小型缶は同16.3%増の783千本と増加しました。

平成22年度缶種別・用途別出荷実績

| 缶種 | 平成22年度実績 | | | | | | | |
|-----------|------------|-------------|-------------------|-------------------|----------------|---------------|----------------|---------|
| | 本数 (千本) | 前年度比 (%) | 用途別〔(本数) (千本)〕 | | | | | トン数 |
| | | | 石油 | 化学 | 塗料 | 食料品 | その他 | |
| 200L缶 | 14,521 | 109.4 | 1,787 (105.3) | 11,623 (110.8) | 746 (103.2) | 184 (98.1) | 181 (103.8) | 335,466 |
| ペール缶 | 20,379 | 103.6 | 10,492 (102.7) | 8,559 (104.1) | 716 (109.8) | — | 612 (105.0) | 33,434 |
| 中小型缶 | 783 | 116.3 | 3 | 750 | 7 | — | 23 | 5,474 |
| 亜鉛鉄板缶 | 383 | 101.8 | — | 153 | 1 | 6 | 223 | 2,550 |
| ステンレス缶 | 34 | 98.7 | — | 27 | — | — | 7 | 817 |
| 合計 | 36,100 | — | 12,282 | 21,112 | 1,470 | 190 | 1,046 | 377,741 |
| *前年度比 (%) | — | — | 104.5 | 110.1 | 103.6 | 99.1 | 103.0 | 108.6 |
| *構成比 (%) | — | — | 15.5 | 76.5 | 5.0 | 1.2 | 1.8 | 100.0 |

(注) 1. 用途別200L、ペール缶の下端()は前年度比。 2. *前年度比ならびに、*構成比は、トン数ベース。 3. 亜鉛鉄板、ステンレス缶は、200Lドラム及び中小型缶を含む。

(単位：千本)

| 缶種 | 13年度 | 14年度 | 15年度 | 16年度 | 17年度 | 18年度 | 19年度 | 20年度 | 21年度 |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 200L缶 | 12,386 | 13,590 | 14,502 | 15,186 | 14,952 | 15,393 | 15,800 | 12,945 | 13,270 |
| ペール缶 | 22,952 | 23,049 | 22,898 | 22,630 | 22,642 | 22,384 | 22,513 | 19,973 | 19,672 |
| 中小型缶 | 981 | 1,053 | 1,042 | 1,119 | 967 | 922 | 927 | 784 | 673 |
| 亜鉛鉄板缶 | 307 | 312 | 329 | 413 | 451 | 470 | 461 | 446 | 382 |
| ステンレス缶 | 22 | 30 | 42 | 46 | 39 | 39 | 39 | 34 | 34 |
| 合計 | 36,648 | 38,034 | 38,813 | 39,394 | 39,051 | 39,208 | 39,740 | 34,182 | 34,031 |

会員

《正会員》

- 斎藤ドラム罐工業(株)
- (株)長尾製缶所
- JFEコンテナ(株)
- (株)日鐵ドラム(株)
- (株)ジャパンペール
- (株)前田製作所
- 新邦工業(株)
- (株)山本工作所
- ダイカン(株)
- (株)東京ドラム罐製作所
- (株)東邦シートフレーム(株)
- 森島金属工業(株)

《準会員》

《賛助会員》

- エノモト工業(株)
- (株)大和鐵工所
- 三喜プレス工業(株)
- (株)城内製作所
- 東邦工板(株)
- (株)水上工作所

ドラム缶工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10
(鉄鋼会館6階)
TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969
e-mail : drum.pail@jsda.gr.jp

URL : <http://www.jsda.gr.jp/>

ひびきNo.62 (平成23年8月18日発行)

発行人 ドラム缶工業会
専務理事 事務局長 米倉 隆行

本誌は環境に配慮した工程で印刷しています。